

いつまで「知られざる」大国か？  
ロシアへの省察から生まれる  
21世紀の新たな歴史と知見

影響力低下は皮相な見方  
激変するロシアの現実こそ  
現代世界そのもの

ソ連邦が解体してから早くも、13年の月日が流れました。米国と覇権を争った東西冷戦時代のソ連邦と比べて、現在のロシアを「存在感が薄くなった」と感じている人も少なくないでしょう。ゴルバチョフの失墜、エリツィン前大統領期の経済破綻と社会不安等々、ソビエトからロシアへの移行期の不安定な断片的情報が「小さくなったロシア」の印象を強めてしまったように思われます。

しかし、現実のロシアは決して「小国」ではありません。ロシアは今でもアフガニスタンやイラクをはじめとするイスラム圏の国々に大きな影響力を持っていますし、ロシアから発信される情報が世界の政治・経済の動向を左右することもあるのです。また、「破綻」といわれた経済も現在では急勾配の右肩上がりとなり、2000年のプラス10パーセントを最高に平均6パーセントの成長率を見せています。経済の発展とともに、新ロシア人と呼ばれる富裕層が誕生し、若い世代のあいだでは帝政時代の貴族風邸宅を郊外に建てて暮らすことが一種のブームとなってもいます。国民の7割を超える支持を得、「強い国家」の建設をめざすプーチン大統領のもと、ロシアは今確実に変わりつつあります。

専制「後進国」から人類最初の社会主義国へ、さらに市場経済国へと80年足らずのあいだにこれだけの激変を経験した国は世界でも稀でしょう。そこには、例えば国家形態の変容と経済・法のあり方、民衆・大衆文化とアヴァンギャルド芸術の関連性など、現代の私たちにとってもアクチュアルな興味深いテーマが無数に存在しているといえます。しかも、ロシアは今では遠い国のような印象がありますが、実は日本との関わりも深い国なのです。明治から現代までロシアは政治や経済、思想、文学など多方面で日本に大きな影響を与えてきました。

ソ連邦解体後、韓国、中国などの経済進出に多少出遅れましたが、今こそ日本も早急に隣国ロシアと正面から向き合う時でしょう。この機会を逃すべきではありません。



## 文字文化だけが文化にあらず ロシア社会の核は オーラルな部分にこそある

ソ連邦が崩壊すると、自分たちのアイデンティティをどこに求めるかについてロシアで多くの議論が繰り返されたことは十分想像ができるとおりです。ソビエト社会主義体制とそのイデオロギーが70年以上もの長きにわたりこの国を支配してきたのですから。アイデンティティへの希求は、欧米のカルチュラル・スタディーズとは視点も方法も異なる、現代ロシアの「文化学（クリトロロギヤ）」の活況をもたらしています。

また西欧と比べて、書き言葉の歴史が浅く、社会のごく上層部の支配者や聖職者のみがそれを独占していたことはロシア文化の大きな特徴です。9世紀にキエフを中心に国が成立する際に、キリスト教の伝道を目的に導入された教会スラブ語をはじめとして、年代記

や役所の文書、領地や修道院の経営・収支簿、それに少数の世俗物語を記すための書き言葉はありましたが、ロシア社会の基盤を支えていた圧倒的多数の民衆（ナロード）の文化は長い期間、文字文化とはまったく無縁だったといえます。

しかし、このことはただちにロシアの文化、とくに民族・民俗文化の貧困を意味するものではありません。共同体のなかで長い時間にわたって蓄積されてきた民衆の有形・無形の文化全体—それは、ごくありふれた言葉の言い回しや動作から、昔話、民謡や英雄叙事詩等のフォークロア、生活上の知恵、さらに対人関係、メンタリティ、世界観・宇宙観にまで及びます—がオーラルな回路を通して確実に伝承されてきました。しかもそれらの保存と継承にあたって民衆は、文字を読めないからではなく、社会にとってもっとも必要かつ不可欠な「情報」はむしろ口承で伝えるべきである、と誇りをもって考えていたとすれば、ロシア文化もこれまでとは違う視点で見ることができるでしょう。ソ連時代には体制批判の言説は出版されず、口伝で巷で広まってゆきました。そして、これはソ連体制下の言論・出版の自由のなさや苛酷さのためだと説明されますが、それだけで

はありません。民衆の記憶から記憶への伝承こそがもっとも信頼すべきものと考えられていた一つのあらわれです。

## 伝統・プリミティヴ VS. アヴァンギャルド 民衆（ナロード）VS. 貴族・インテリゲンツィヤ そのはざまに立つロシア民俗学

ロシアをいつまでも「神秘」と「不可解」の社会としておくわけにはいきません。そのためには、ロシア革命直後のソ連を訪問して「この国の社会主義の実験は失敗」と予言したパートナー・ラッセルの言葉—この国は、想像力を忍耐強く、かつ情熱的に働かせてこそ理解できる—を思い出す必要があると思います。

ロシアの民衆はオーラルな世界に生きてきました。文字文化は聖職者や教会関係者、権力者や貴族といった社会のごく一部の人々の所有物として機能してきたのです。そして、この社会上下層間の相互不可侵的な断絶（ある意味で、それは現代もなお存続しています）

の存在をロシア人自らが認識し、この絶対的とも言える断層を繋ぐ労苦の歴史のプロセスのなかでこそロシア文化は創造されてきました。民衆の文化とはまったく無縁に見える「貴族的」でハイカルチュアな作品（文学、美術、音楽等）が、その根底に民衆文化の素材やイデーをしっかりと吸収してきたのです。ここに掲載した写真は現代の土産物の箱ですが、表面に見えるのは有名な道化師を描いたプリミティヴな民衆版画（ルボーク）です。この種の版画は今では、ロシア製コーラやTシャツの絵柄にもなっていますが、実は20世紀初頭に沸騰したアヴァンギャルド美術の強力な酵母ともなりました。同様のことは、現在さかんに見直されているロシア革命以前の貴族の領地屋敷（ウサーヂバ）の文化についても言えます。そこではロシアの農村の原風景が見られ、貴族もインテリゲンツィヤも、そしてナロードも登場してきます。一般に民俗学と言うと、昔話とか妖怪についての信仰とか、あるいは民衆の生活そのものを対象にすることが多いのですが、私はロシア文化の歴史的・機能的観点から、貴族・インテリゲンツィヤとナロードを統合的に見ていかなければならないと考えています。（談）



### 言語社会研究科教授 坂内徳明

1949年生まれ。1968年東京外国語大学国語学部ロシア語科卒。

一橋大学大学院社会学研究科満期退学。社会学博士。

研究領域は、民衆文化論、ロシア民俗学史。

昔話や伝説を中心とした口承文学、民間宗教や歳時儀礼、縁日や定期市における民衆娯楽、民俗版画や大衆本などを素材として考察を行っている。

「メンタリティーも文化も知れば知るほど面白い、それがロシアです」

